

## ▲▲▲ 目の黒い内に行ってみたい夢・幻の山 ▲▲▲

千島列島・爺々岳（チャチャヌプリ=1822m） & 阿頼度山（アライドサン=2339m）

赤澤 東洋

体力があり費用の工面さえつければ今やエベレストでも南極でも世界中どこへでも行ける良き時代になっているが、私等日本人にままならない地がロシアの占有を許したままになっている北方領土であるに違いなく正に夢・幻の地なのである。

北と南とどっちが好きかと問われるなら私の場合は断然北ですとなる。父が岩手県出身であり、幼年時代を疎開していた宮城県で過ごした事もあって、これはもう反薩長、親会津はむべなるかなであり、さらに発展して九州、東南アジアよりは雪のある北海道、カムチャッカの方に興味を惹かれますとなってしまふのだ。

国後島の爺々岳を始めて目にしたのは1963年（昭和38）夏、岩尾別温泉から羅臼岳に登り知床半島を横断して羅臼側へ下った時の事で、知床半島はまだ横断道路もなく人間よりもヒグマの方が多いと云われる「秘境」だった。洋上に浮かぶ国後島は意外に近く、秀麗な爺々岳の格好良さに心惹かれた私はいつか登ってみたいものと思った。



（知床から遥かクナシリを望む 1963年筆者撮影）

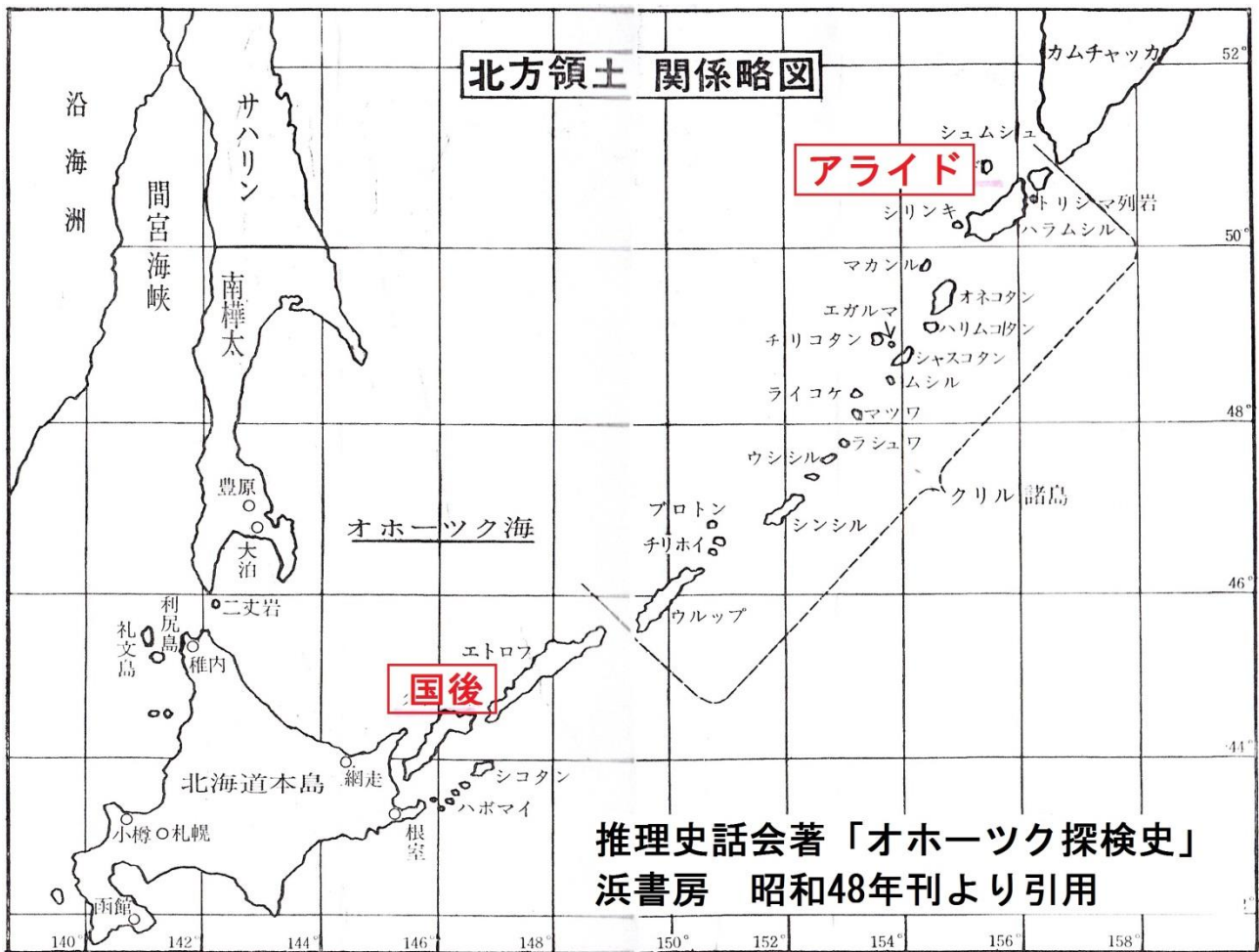


（その時はこんな格好で歩いた）

とはいえ、それは深く考えたものでもなく漠然たる思いだけで、千島列島、ひいては北方領土問題に深い関心を抱くようになったきっかけは1966年（昭和41）に朝日新聞に連載された本多勝一記者のルポ「北洋一独航船の記録」だった。本多記者は1963年（昭和38）1月、愛知大学山岳部員13名の薬師岳遭難時に、当時としては画期的な大型ヘリをチャーターし空から現場に駆けつけて「太郎小屋に人影無し」の特ダネで世間をあつと言わせ名をあげ、その後も「カナダ・エスキモー」や「ニューギニア高地人」等のルポが話題を呼び朝日新聞を代表する名物記者になっていた。「北洋一独航船の記録」もわずか96トンという小型タラ漁船に乗り込んで、1965年の1年間で380人もの死者を生んだという世界最悪の漁場と云われる厳冬の北洋で命がけの取材をしたもので、いつもながらの突撃体制で挑む貪欲な記者魂に引きつけられた私は新聞を切り抜きスクラップブックに貼り付け、少しずつ千島列島に関する書物・文献を読み始め、そうした中で円錐形の美しい阿頼度山（アライド山）の存在を知った。

阿頼度山は富士山を洋上に浮かべたような成層火山、千島列島の最高峰で北海道の最高峰旭岳（2290m）より高いと知り、その事だけでもいつか行ってみたいと思った。初登頂は北大山岳部創立者の伊藤秀五郎と小森五作の両名で1926年（大正15）7月の事だった。伊藤のその時の紀行を含む「北の山」は山

岳名著として名高く中公文庫にも入っているので読まれた方もいるだろう。当時、千島列島は日本の領土でありアライド山には北大隊の数年後、スウェーデンの探検家ステン・ベルクマンが千島に一冬二夏滞在し千島紀行という優れた紀行文を発表しているし、スイス人の A・グブラーや長谷川伝次郎等の北千島学術調査隊、関西学生山岳連盟隊等が足跡を残している。



そして 1945 年日本敗戦、千島列島はソ連に占有され、この方面の情報は極めて稀となり、本多勝一記者の「北洋一独航船の記録」のような周辺海域の記録が出て来る位で暫し空白地帯となっていたのだ。

長い年月が流れ漸くそこに風穴を開けたのは、伊藤秀五郎の北大山岳部の後輩阿部幹雄達だった。1981 年 5 月北海道山岳連盟のミニア・コンカ (7556m) 遠征隊に参加した阿部は、目の前で 8 名の仲間が滑落死し、只 1 人生還という遭難事故に遭遇したが、ペレストロイカで揺れているソ連のどさくさに紛れて巧みに登山許可を取り付け 1990 年 5 月、遂に戦後初のアライド山遠征を果たしたのだ。地の利があるにしてもこの辺の行動力と何としても出かけたという強い意志にはほとほと感心してしまう。これぞ北大山岳部の面目躍如という所であり、こちらのように只行ってみたいなあと思っているだけでは何も解決しないのだ。その時の阿部の紀行「北千島冒険紀行」はアライド山等秀麗な千島の山々がふんだんに盛り込まれ目を楽しませてくれる。

阿部はその後 1992 年秋にはシーカヤックガイドの新谷暁生達 4 名と国後島にも遠征しカヤックを漕ぎ島の東海岸に上陸し爺々岳にも登っている。わずか 2 年の間に千島列島・29 島の最高峰アライド山と 2 番目の高峰チャチャ岳に登ると言う離れ業で、その行動力・実行力は羨ましく感服するばかりだ。



(洋上に浮かぶアライド山 2339m)

<引用出典 <http://www.ecosystema.ru>>



(国後島 爺々岳 1822m)

<引用出典 <https://www.tripadvisor.co.uk>>


阿部と違って伝手も地の利もない当方、アライド山もチャチャ岳も永遠に書物・文献を読むだけで満足し想いを馳せる存在になってしまったが、潔く現実を認めるしかないだろう。どさくさに紛れての登山許可も難しいに違いないし、第一どう頑張っても今や遠征するだけの気力、体力がないのだからしょうがない。

それにしても北方領土問題は深刻だ。恐らく我が目の黒い内に領土問題が解決する事はないだろう。日本の対応も稚拙すぎたが、相手が悪すぎる。プーチン体制となり、かつてのソ連時代の力を取り戻しつつあるロシアが容易に返還に応じるわけもなく、お先真っ暗、およそ戦争というのは民族や宗教をめぐる衝突するもので、もっと単純に言えば領土をめぐる縄張り争いであり戦争で奪われたものは戦争で奪い返すしかないという事になるのだから、これはもうどう考えたって無理な話のだ。失ったものの大きさに想いを馳せるにつけ、バカな戦争をしちゃったものだとつくづく思う。

#### (参考文献)

- 舘脇 操著『北方植物の旅』 朝日新聞社 1971年2月刊
- 落合忠士著『北方領土』 タカ双書 1971年5月刊
- 推理史話会著『オホーツク探険史』 波書房 1973年10月刊
- 別所二郎蔵著『わが北千島記』 講談社 1977年8月刊
- 伊藤秀五郎著『北の山』 中公文庫 1980年3月刊
- 阿部幹雄著『北千島冒険紀行』 山と溪谷社 1992年10月刊
- S・ベルクマン著『千島紀行』 朝日文庫 1992年8月刊
- NHK取材班編『北方四島・千島列島紀行』 NHK出版 1993年6月刊
- 本多勝一著『北洋独航船・本多勝一集8』 朝日新聞社 1994年12月刊
- 新谷暁生著『北の山河抄』 東京新聞社 2013年10月刊

(完)

特集記事目次画面に戻るには、画面最上段最左側の「戻るボタン」で戻って下さい